

EP育ちのマグロ、出荷へ

8月から本格販売

近畿大学は23日、東京・中央区の同大学東京センターで、エクストルーダーペレット（EP）型の配合飼料のみで養殖した近大マグロを8月から出荷すると発表した。近畿大学水産研究所の升間圭所長は「2002年にクロマグロの完全養殖に成功し、（天然）資源に依存しないとされていたが餌は完全ではなかった。配合飼料での養殖に成功し、今後ますます取り組みを進ませたい」と、持続可能な養殖に貢献していく考えを強調した。

おいしさ変わらさず

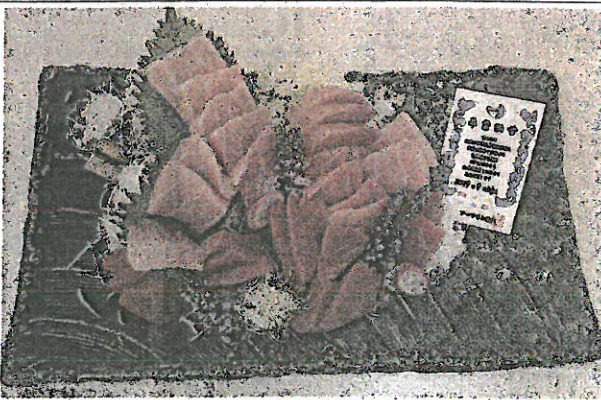
近畿大学水産研究所

近畿大学水産養殖種苗センターの岡田貴彦センター長が開発の経緯について説明した。完全養殖マゴロの研究と同時並行で進められた飼料研究は、08年の養成試験で生残率、増量率ともに生餌に劣り一度は開発を断念したが、マリノフォーラム21のクロマグロ養殖用餌料高度化促進事業に日清丸紅飼料㈱と共同で参加したことを機に再チャレンジを開始。15年から和歌山・串本の養殖漁場



「クロマグロの持続可能性にも取り組みたい」と話す升間所長（中央）

配合飼料化に取り組む中、生残率でも成長比較でも生餌と大きな差がない配合飼料の開発に成功した。配合飼料で育てたマグロとして、16年から鹿児島・奄美の養殖池で育成していた魚を使用。販売にあたり、同大学の完全養殖マグロを販売する店舗で行った試食アンケートでは味、歯応え、見た目、匂いの4項目で配合飼料と生餌で大きな結果を得られ、「合格点と判断（岡田センター長）、販売に踏み切った。飼料の開発を請け負った日清丸紅飼料水産研究所の白鳥勝執行役員所長は、出荷サイズである40キ程度まで育てる大口化が課題だったと説明。11年からマリノフォーラム



「赤身、脂身がはっきりした仕上がりになった」と白鳥執行役員が評価する配合飼料で育てたマグロの刺身盛り合わせ

21の事業に参加すること、油脂クロマグロ用EP飼料の開発に取り組み、15年には製粉化に成功。30ミサイズの大口径EP飼料は販売されていなかった（白鳥執行役員）という。固形のEP飼料は保管や輸送が簡単でコストも低くて済み、常温で保管できるため冷凍の手間がかからない。自動給餌機を利用できるため作業が簡単な点も強みだ。升間所長は「生餌だと600〜700キ必要な養殖方法を確立につなげたい」と力を込めた。